

高井鴻山に係る歴史的建造物について (一)

—— 脩然楼ゆうぜんろう、時倚軒じいけん、碧漪軒へきいけん ——

金田 功子

はじめに

高井鴻山は江戸時代の後期文化三年(一八〇六)に小布施村上町かんまちの豪農商高井家に生まれた。江戸の浮世絵師葛飾北斎を招いたことで知られる、北信濃切つての文化人である。芸術文化教育とさまざまな分野で多大な功績を残し、明治十六年(一八八三)七十八歳を以て高井家隠宅脩然楼で没している。

高井鴻山に関わる歴史的建造物で、名称が付いているものとして「脩然楼」「時倚軒」「碧漪軒」という三つの建物がある。このうち「脩然楼」は、「小布施町立高井鴻山記念館」の中心をなす木造二階建ての建物である。鴻山のサロン兼書斎、隠宅であった。

「脩然楼」に隣接する六畳一間の建物の名称が、昭和五十八年(一九八三)十一月に高井鴻山記念館開館以来「碧漪軒」であったが、平成二十六年(二〇一四)九月に「伝・碧漪軒」と改称された。

「脩然楼」と「伝・碧漪軒」がある高井鴻山記念館内には、他に、文庫蔵、穀蔵、屋台庫と名付けられた展示蔵があるが、「時倚軒」という名称を持つ建物は無い。

「時倚軒」とは、一般には鴻山の号として知られている。建物の名称と

しての記述では、高井家の本宅を「時倚軒」と言っていた(『高井鴻山伝』昭和六十三年)とある。しかし、残されている「時倚軒」の扁額の賛から、「時倚軒」は鴻山の書斎として建てられたことがわかっている。

「碧漪軒」とは、高井鴻山が小布施に逗留した北斎のために用意した画室(アトリエ)といわれる。

筆者が、鴻山の書斎兼隠宅であった脩然楼を初めて訪れたのは、昭和五十一年(一九七六)である。北斎館が五十一年の十一月に開館したのにあわせて長野の出版社信濃路が小布施のガイド本の出版を企画し、その取材のためであった。脩然楼は、その優雅な名をもつ建物としての華々しさはすでになく、中庭のつたの葉がからみついた大きな立石に、かつての生活がわずかに偲ばれたことを覚えている。その後昭和五十三年、やはり小布施のガイド本出版の取材に訪れた時も、脩然楼はひっそりと佇んでいた。

昭和五十七年(一九八二)、高井鴻山記念館開設の準備のため小布施町文化財審議委員会を中心に「高井鴻山翁学術調査研究委員会」がもうけられた。文化財審議委員の一人として、調査準備のため脩然楼に掃除にきたことがあった。障子を全部開け払い、たまっていたほこりを掃き出した。ほこりがもうもうと、息ができないくらいまいあがった。

高井鴻山記念館が開館したのは昭和五十八年十一月である。東京から高井進氏を迎えて、こけらおとしの北斎太鼓が中庭に鳴り響いた。しかし、

オープンした脩然樓の姿と、筆者がみてきた鴻山の書齋兼隱宅の脩然樓の姿が違っていたことに違和感を覚えた。脩然樓の一部であった六畳の間が切り離され、東に移されて独立した建物「碧漪軒」(鴻山が建てた北齋のアトリエ)として紹介されていた。町役場の説明によると脩然樓の修復原工事のための調査の結果、六畳の間は二階建ての脩然樓と建てられた年代(時代)が違うということで切り離されたということであった。

現在、高井鴻山記念館内には「脩然樓」と「伝・碧漪軒」は存在するが、「時倚軒」はない。これら鴻山に係る二つの建物が、

- 一、どのような状況下で誰が建てたのか
- 一、それぞれの建物が、鴻山とどのように係わりあっていたのか
- 一、鴻山が暮らしていた時代の脩然樓は、どんな姿をしていたのか
- 一、どのような経過で現在に受け継がれ、今、小布施においてどんな役割りを背負っているのか

などについて順次調べたい。それぞれが互いに関連してはいるが、今回は鴻山が暮らしていた時代の脩然樓の姿について調べた。

なお、「碧漪軒」については、北齋研究所研究紀要第二集に筆者が「北齋の画室「碧漪軒」と鴻山の漢詩からみた小布施の北齋」に調べた範囲で記している。

一 脩然樓について

脩然樓とは、高井鴻山記念館の主体である木造二階建ての建物である。

脩然樓前にある立て看板の説明文には、次のように記されている。

脩然樓

この建物は鴻山の祖父作左衛門(宝曆三〜文政九 一七五三〜一八二

六)の時代に建てられたものといわれ、鴻山はこの建物を「脩然樓」

と名付けて書齋として使用していた。

「脩然」とは「物事にとらわれず思いのままに進退する」という意味がある。中国明時代（みん）の文人陳文燭（ちんぶんしよく）の書齋「脩然亭」にあやかっけて付けられたものと推察される。

鴻山はここで書画や読書に専念し、あるいは葛飾北齋をはじめ訪れてくる文人墨客と語り合い、また佐久間象山ら幕末の志士たちと国事を論じたのである。

この説明にあるように、「脩然樓」は鴻山の祖父作左衛門（ながひら）が建てたといわれている。木造二階建ての落ち着いたたたずまいを残す建造物である。

鴻山没後、資料に記されている脩然樓関係の写真と図面から、その姿を辿ってみる。

(一) 写真・図面からみる脩然樓

高井鴻山が没したのは明治十六年(一八八三)二月六日、終焉は、脩然樓の茶の間である。その後、大正十三年頃、大竹元次郎(昭和四十五年没七十三歳)が賃貸で入居するまでの約四〇年間、脩然樓がどのようなになっていたか。

鴻山没後とはいえ、鴻山の後妻ふじと、その子孝太郎と兼次郎の二人の息子がいる。ふじはしばらくは脩然樓で暮らしたと思われるが、親子三人はその後東京に戻っている。その後の脩然樓がどうなっていたのか。明治・大正期における鴻山の伝記や遺墨展示目録などはあるが、写真図面は見当たらず、ようやく昭和二年(一九二七)の信濃毎日新聞社に連載の「幕末の儒者鴻山」に脩然樓をみる事ができる。以後、昭和六十三年(一九八八)の『高井鴻山伝』まで、それぞれに掲載された脩然樓をみていく。